

診療所における在宅診療の実践（その5）



在宅診療の問題点

松尾クリニック院長 松尾美由起

在宅診療を実際に行なっていると、種々の問題に出会うことがある。経営上という言葉を広義に解釈して、問題点を述べてみたい。

●時間的な制約

外来診療と在宅診療を行っている場合、最も困るのは、外来診療中に在宅患者が急変したときである。ヘルプしてくれる医師がいる場合は別として、一時外来をストップして駆け付けねばならない。最近では慣れた外来患者さんたちは、通り道を開けながら「気を付けて」と言ってくれるが、帰ってくるまで気が気でない。「診療中に緊急往診が入る事があります」と明記しておくべきかもしれない。

当院では、3回線の電話のうち2回線を自宅に転送し、残りの1回線を留守番電話からポケットベルに転送している（図1、写真1参照）。そのため、夜間や休日の緊急往診も時間的制約および拘束感は免れない。しかし、当直や救急外来の緊張感にも似たものがあり、夜明けに車を走らせていると眠いながらも充実感がある。気持ちを転化させ

ていくのがコツといえる。

しかし、スタッフの時間を拘束してはいけない。自分がこれだけ頑張っているのだからと押し付けると、フル回転している者がくたびれてしまうのである。やり甲斐のある忙しさと制約の微妙なバランスを崩すと、スタッフが辞めていくことになる。新しい人材が慣れるまで、残った者の疲れが倍増し、意欲低下にもつながってしまう。

●介護家族の理解度・協力度の問題

介護家族の理解や協力が少ない場合、訪問看護の実績があがらないことがある。

例えば、脳内出血にて片麻痺があり、上肢に拘縮を来していた患者さんの場合をみてみよう。腋下部に真菌症を認めたため、訪問看護婦は消毒し、抗真菌剤の塗布の方法と部分浴・清拭の方法を家族に教えた。また、寝巻の袂の一部を開くことによって、拘縮のある患者さんの着替えが容易にできるよう指導した。しかし、3日後訪問しても寝巻

松尾クリニック診療後にお電話される場合、ここに(裏側)あげています電話番号は、3ヶ所にかかるとなっております。どの番号にかけられても松尾院長につながりますので、安心しておかけ下さい。

電話番号

0729-91-6586

0729-91-5116 → 松尾院長の自宅

0729-91-6375 → 松尾院長のポケットベル

図1 外来および在宅に配っているカード

転送電話のしくみ

松尾クリニック

ご利用の方は松尾先生が不在の場合
下記へ電話して下さい。

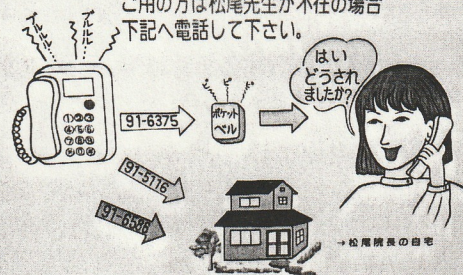


写真1 クリニックの壁面に貼っている転送電話の案内

は前回と同じ状態で、腋下部からの浸出液が敷布にまでしみこんで悪臭をともなっていた。何度も繰り返しかえし同じことを言っても、家族は「はい、やりますよ」と返事はするが、状況は変わらなかった。根比べのようなものであるが、看護婦にとっては落胆以外の何ものでもない。

こういったケースの場合、連日の訪問看護に出られるだけのスタッフがいれば解決が見つかるかもしれない。民間の開業看護婦への経済的援助や、内容のある訪問看護ステーションの充実が望まれる。

●臨時投薬の問題

時間外に上気道炎などで軽度の発熱を認めたり、下痢を頻回に起こすことがある。老夫婦の家庭であつたりすると、薬を取りにも来れない。そんな時のために、クリニックがあらかじめ準備した緊急用の薬箱(写真3)を常備してもらっている。必要に応じて、その中の薬剤を処方する。定期的に薬剤を点検しておく必要があるのと、医師の処方しなければ使用できない由を明記しておく。

さらに、在宅患者の電話番号および処方薬剤のリストを常に携帯していると便利である。

●夜間の在宅診療

常時車のトランクに「緊急往診セット」を搭載しているのだが、さて急に駆けつけた場合、案内中身が欠けているものである。点滴をしようとする点滴セットがなかったり、アルコール綿が見当らなかつたりするものである。時間の無駄を避けるために万全を期さねばならない。挿管用のチューブやアンビューバッグも使用しないでよいことを願いつつ用意しておく。緊急に備えるためには、多少の投資も必要である(写真5,6)。



写真2 訪問看護風景



写真3 緊急薬箱



写真4 訪問看護風景

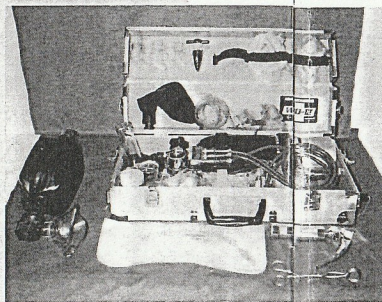


写真5 緊急セット



写真6 往診セット

●検査上の問題

X線検査やCT、MRIなどの検査が必要と思われる場合に問題なのが、移動についてである。車いす移動ができるのであれば家族だけでもなんとかなるが、拘縮があり寝たままできない患者さんの場合が問題である。以前にも触れたが、あらかじめ病院に迎えにきてもらえるのか確認しておくこと、寝台車の手配の方法を考えておく必要がある。

●高齢介護家族の問題

高齢者世帯の増えている現在、介護者の健康管理が重要である。特に患者を移動させる時に腰を痛める例が多く、「寝たきり潜在患者」さんの可能性を常に考慮しなければならない。患者移動機の紹介や介護用品のリースなども説明して無駄を省き、手抜きできるところはするように指導しておかねばならない。そのためには、常に新しい情報を仕入れておく必要がある。

また、献身的に介護することにより、患者自身の自立が困難になるケースもある。要は、ごこまではしてあげてよいが、それ以上は訓練としてさせるべきであることを教育しなければならない。とにかく、病状や治療について、説明に説明を重ねても理解していないことが多々あるので、時間をかけるべきだと思う。

●まとめ

以上のように、時間と気力と意欲のいる仕事であり、継続が重要で、スタッフをやる気にさせねばならない。実施する限りは、質の高い在宅診療を提供したい。多くの無駄と労力を惜しまず接すれば、得られる人間関係・充実感はある。確かである。